

■学校経営のポイント

誰もが「かけがえのない」マイノリティ

小島 宏

最近、学校におけるマイノリティ(minority)への対応が話題になることが少なくない。今号は、マイノリティの捉え方と対応の仕方について考察する。

マイノリティの捉え方

マイノリティとは、少数者、少数派、少数弱者などと言われる社会的少数者のことである。

一般的に、少数者であるが故に、社会参加が制約され、偏見や差別、いじめなどが障壁となって生きづらさを感じている人を指す。

学校においては、LGBT、障害のある子供、特別な才能を持つ子供(ギフテッド:intellectual giftedness)、外国人や少数民族の子供、移民や避難民の子供などを含め、全ての子供一人ひとりが異なった個性を有しており、ユニークな存在であり、何らかの意味で誰もがマイノリティで、かけがえのない存在であると考えることが望ましいといえよう。

LGBTの捉え方と配慮

最近、性的少数者(セクシャルマイノリティ)として、LGBTが話題となり、学校における適切な対応が求められている。

LGBTとは、Lesbian(レズビアン、女性の同性愛者)、Gay(ゲイ、男性の同性愛者)、Bisexual(バイセクシャル、性別に拘らない性的指向を持つ人)、Transgender(トランスジェンダー、体と心の性が一致せず違和感を持つ人)の、頭文字をとったものである。Questioning(クエスチョニング、自分の性的指向や性自認が決まっていない人)とQueer(クィア、性的少数者)の頭文字を加えて、LGBTQという場合もある。

近年では、マジョリティも含むすべての人にかかわるものとして、性的指向(SO)と性自認(GI)を表す「SOGI」(ソジ:Sexual Orientation and Gender Identity)という言葉も目にするようになった。

LGBTは、性的指向や性自認の少数者であり、多

様な個性の一つとして捉え、その存在を認めて、学校生活や学習活動に支障のないように配慮する必要がある。

なお、性教育については、小学校体育科、中学校保健体育科で扱うことになっているが、学校教育活動全体を通じて指導する必要がある。

マイノリティを特別視しない

マイノリティが、排除や差別、いじめの対象となることがある。

マイノリティが多様な個性の中の一つであるという立場に立ち、互いに認め合い、尊重し合う指導を、道徳科などの授業や生徒指導の中で充実させるようにする。

時として、周囲から違和感をもって見つめられていることや、差別されていることに、当事者でさえ気づかないことがあるので、留意を要する。

教職員の意識改革

教師が、LGBTをはじめとするマイノリティについて、無意識のうちに言った言動で、本人を傷つけたり、学級の子供たちの差別意識を助長したりするので、留意を要する。

そこで、学校として子供への指導だけでなく、教職員に意識改革のための研修を実施する必要がある。

校長のリーダーシップ

校長は、すべての子供が何らかの面において、その子特有の個性を持っていることを教職員に周知徹底し、十分に配慮した指導・対応を粘り強く求めていくことが必要である。

そして、マイノリティへの適切な対応について、さまざまな機会を通じて、保護者・地域等へも広めていくようにしたい。

(こじま・ひろし=元東京都公立小学校長・(公財)豊島修練会顧問)

●「支える生徒指導」を創造していくための手がかりに 《好評発売中！》
「支える生徒指導」の始め方——「改訂・生徒指導提要」10の実践例

新井肇【著】 A5判／定価 2,310 円

